

育児の力

むらた あきこ
村田 晶子

「子育て支援」が盛んに行われている。従来女性の無償労働に依存してきたことに目が向けられているとはいえ、少子化対策のためである。そこには、リプロダクティブ・ヘルス／ライツの視点も、当事者が育児の力をつけるための学習の議論も抜け落ちている。

育児の力。それは、親が、授かった子どもとの関係を育て、育てるものになるための、人間としての力。「人は人の中で人間になる」「人格は人のかかわりの中で育つ」と言われる。育児は、親がそれまでの人生の中で培ってきた人とかかわる力や価値観を総動員させながら、子どもの未来＝社会的人格の形成を見通して、方向を選び取っていく営み。

これは孤立しては身に付かない。父親の育児休業取得も叫ばれるが、家庭が孤立している状況をそのままにして父親が育児休暇を取っても何ら変わりはないのではないだろうか。親も子ども確かに豊かな人間関係の中で生きることができ、自己の人格の成長を実現し続けること。子どもたちのことを一緒に考えあえる人間関係をもつこと、創ること。これが今不可欠だ。

その中で学ぶべきことは何か。近代学校制度の下で身に付けた能力主義や効率主義的な見方では子どもの人格は育たない。「いのちを人間的に人格的に育む力量の形成を支える育児期のおとなの学習」——その実践的展開とこれを支える仕組みの構築は、緊急の課題だ。

そして、授かきたいのちを心から喜べる社会。生まれたいのちが大事に育てられ、おのおのの自己実現が可能で、公平な社会。暴力や戦争のない平和な社会。これらを実現することにおとなたちが責務を負い、社会の方向を見極め、社会をつくる当事者としての力を形成する学習、社会教育の充実が今こそ重要になっている。

■プロフィール 早稲田大学文学学術院教授。専門は社会教育学（社会教育実践研究，社会教育史研究，成人女性の学習論研究）。社会教育現場で講師を務めながら、育児期の女性の学習のあり方、学習を組織するマネジメント力育成の研究を進める。著作「『子育て支援』政策の問題性—育児期の女性にとっての意味—」（『早稲田大学大学院文学研究科紀要』2005年3月、第50輯）など。